

**（教師の現状と気持ち）**

みなさんこんにちは。筑波大学附属小学校の森田です。よろしくお願いたします。

まず、こういう場に来ると、だいたい飼育がいい加減だと、学校は非難的になります。先ほどの西東京市の小学校などは校長先生の理解があり、担任の先生方の理解があって、成立していると思うんですけども、多くの学校はそれほど理解があるわけではありません。逆にいえば、邪魔者扱いされていることが多いわけです。ですから、桑原先生のご指摘のような現状があるわけです。しかし、そうすると必ず「学校の先生何しているんだ」。つまり、われわれが一生懸命教育をしているわけですけども、それに対して、世間はまた非常に冷たい目で見ている。保護者は、「あんな学校には子どもをあずけられない」などと不安に思う方もいらっしゃる。その原因を探ってみると、桑原先生ご指摘のように、私たちは、教育の細かいことについては大学で教わってきますが、**学校飼育動物については全く教わっていない**。そういう意味では、群馬大学などでは、本当にいい教育をされているんだな、と感じるわけです。しかし、われわれは、現実に教員としてすでに教壇に立って子どもたちを教えているわけです。なおかつ、赴任した学校に最初から飼育小屋がなく、そして、自分たちがつくろうというならばそれなりの意義もあるし、それなりの熱意もあるんですけども、行った学校にはすでに飼育小屋があるんですね。そして、大量のウサギがそこに飼われているわけです。そして、それを見ると、本当にみずばらしい状態であったり、それから、自分で発言もしたことがあるんですが、死んだりすればそれは自然淘汰だと、偉そうなことを言って、自分たちの仕事を増やさないように、内心ではしていたわけです。そういうことが、**教師の怠慢だと言われると、非常に心外なわけです。つまり、われわれは目の前にいる子どもたちを育てるわけです。だから、子どもたちだけで精一杯なんですね。**そこにさらに新しいものを付加されるというのは、非常な負担感を感じるわけです。でも、この現代の世の中でやはり動物とのかかわりは非常に大事だと思います。そうするとその**大事さに意義を感じて、一生懸命やる先生が自ずと飼育当番になるわけです。この矛盾わかりますか？**つまり、いい加減で無関心な先生は、「私はできない」と避けて通って、良心的な先生ばかりが負担を背負うわけです。場合によっては、夏休み毎日エサをやり学校まで来ているなんていう先生もいるわけです。ところが、そんなふうに頑張っている、病気になるってしまう動物も出てきます。それを獣医師さんに持っていくと、「なんだこの育て方は」としかられて、「学校は何をやっているんだ」と言われるのです。だから、心ある先生がかわいそうだと思って、見るに見かねて病気の動物を持っていくと、獣医師さんにしかられちゃうわけです。しかも、治療費の出所がないわけですから、下手をするとその先生が自腹を切ることになります。**精神的にも負担を抱え、金銭的にも負担を抱えている、こういう現状では本当に飼育が広がらないわけです。**そういう意味で、この研究会のような形で立ち上げて、それを今度は行政の方にいい影響を与え、なおかつ、獣医師の方々にも学校の現状を知っていただくということで、少し、いろいろなことを紹介したいと思います。

**（教室で飼育をするという実践）**

私は、教室で飼育をするという実践をしています。私の教室での飼育というのは、先ほど言ったように、学校で飼育小屋をつくって飼育するというのが、どうも責任が明確ではないという感じがありまして、教室で飼育したいと思ったわけです。

この写真は、教室で（うちのクラスは40人いますが）、10人に1匹のモルモットを飼っています。それぞれ衣装ケースがあって、教室で勉強しながら、日常的に飼育をしているという状態です。当然給食の最中もいることになります。掃除の最中もいます。そして、朝と帰りに世話をすることになっていきます。このように真ん中に木の箱があるのは、これは子供が作ったんですけども、モルモットが隠れやすいような場所をいろいろ工夫したり、モルモットが住みやすい環境を、いろいろ工夫して作っています。1日モルモットが生活をすると、帰りには新聞紙がぐちゃぐちゃになりますから、これらを子どもたちが片づけるわけです。そして、新しい水を与えて、新しいエサをあげます。これは2年生でしたけれども、制服が汚れるのもかまわず抱っこして、このように喜んでいきます。だんだん慣れてくると、ああいうところに置いておいても、モルモットはじっとしています。抱っこしてなくてもいいんです。逃げたりはしません。逆に床に置いてしまうとどこかはじっこの方について、手の届

かないようなところに入っていってしまいます。このようなことも、子どもたちはだんだん気づいていて、日頃の飼育がうまくいくと、そんなに時間はかからず、いろいろなことに気づくようになります。今は素手で世話をしていますが、最初の頃は汚いというイメージがありますので、ゴム手袋を用意して世話していました。しかし、1か月もすると、素手でやった方が早いということに気づき、ゴム手袋などは誰も使わなくなりました。月曜日から金曜日までは、このように教室で飼っているわけですが、土日が問題になります。

### (土日の対応)

この写真でDと書いてあるのは、Dグループの持ち帰り用のケージです。このような容器にモルモットを入れて、子どもたちは東京都内いろいろなところから来ていますので、だいたい1時間かけて連れて帰ります。ランドセルを背負って、片方にモルモット、片方には飼育用のエサなどをもち、両手に荷物を抱えて帰るわけです。

ちょっと後ろにいる子で、青いケースを持っている子がいますが、あのケースにはムシが入っています。たまたま、3年生くらいになるとムシの勉強もしていて、「モルモットを持ち帰るなら、ムシも持ち帰ろう」ということで、秋にムシを捕ったものが、翌年の1月まで生きていたということもありました。つまり、動物を飼えばムシだって同じだろうという意識が芽生えてきて、理科の授業でも、そうやって持ち帰るということをやっています。普通ムシなどは、1週間で死んでしまいます。1週間というのは、必ず土日に死ぬんです。世話しないで水をあげませんから。ですから、ムシも死んでしまう。それは、ムシの寿命だろうと、子どもたちは勝手に決めつけるわけです。でも実際に私の学級で育てていたら、ムシだって、翌年の1月まで生きていましたから、きちんと世話をすれば、当然死んでしまうムシですが、長く生きさせることができたのは、子どもたちが一生懸命やってくれた成果だと思っています。

だんだん飼育が慣れてくれば、この写真のように自由に抱っこしたり、いろいろなかわりをもったり、スケッチをしたりいろいろなことをして子どもたちがモルモットとのかかわりを深めていきます。私の学校では、クラス替えが3年生と4年生の間に1回あります。3年間持ち上がりということになります。そのような中で、3年生になると、学級の解体とともに、このモルモットをどうするかということが話題になります。先ほどの学校やいろいろな事例では、モルモットを他学年に渡すことをしていますが、私のクラスでは、ほかの児童には渡しませんでした。このことはあとで詳しく説明します。

### (健康のための工夫・ダイエット作戦)

今やっている活動についてお話ししたいと思います。実は、モルモットがどんどんエサを食べるものだから、最初500gくらいの体重が、このころには1kgを越えてしまって、知らない人が見たら「ウサギですか？」というくらいまで太ってしまったんです。これではいけない、どうしよう、ということで、ダイエット用に運動させるために柵を作っています。このように草むらに放して逃げられないように柵をすれば、モルモットはダイエットしてくれるだろうと、つまり、運動するだろうと思ったわけです。ところが、少しも運動しませんでした。草むらに置くと、草を食べてしまって、ダイエットの効果が少しもないということがわかりました。そこで、子どもたちは場所を移動させたわけです。どこへ移動させたかということ、草の生えていない、アスファルトのところですよ。そこに移動させれば運動するだろうと思ったんですが、これも運動しないんです。結構アスファルトは熱いんですね。ですから、彼らもじっとしているわけです。だから、この方法でも、ちっとも運動しない。これは一応、総合的な学習の時間の授業中にやっているんですが、子どもたちは、モルモットが動かないのをただじっと見ているだけの授業になってしまいました。これではあまり学習効果がないなと思ひまして、この作戦はだめだと反省しました。

そこで、授業時間を使わないで、モルモットが運動できる方法を考えようということで、いろいろアイデアを出した結果、普通の授業中に運動させればよいということで、教室の中で行いました。ここにはエサがありませんので、彼らは太ることはありません。でも、1匹では運動しないんです。はじっこの方にじっとしているだけなんです。そこで、教室の端に柵を作って、4匹入れました。4匹入れると運動するようになるんです。どんどん追いかけて回したりして、非常に運動よくするようになりました。約1か月くらいで200gの減量に成功しました。このように新聞紙をひいて、朝から放課後までこうしているわけです。すると時々脱走したりして、足下に来たりするんですけども、子どもたちは喜んじゃうんです。算数の勉強中でもニコニコしたりしています。それじゃだめだということで、足下に来てもしないようになさいと指導しまして、来てもしないふりをしなさいと言いましたら、

だんだん我慢できるようになりまして、勉強に集中できるようになりました。そして4時間目になったら掃除をするわけです。給食もありますので、あまり汚いのは困りますから。

### （お別れの記念製作）

ということをやりながら、いよいよ3年生の終わりになって、せっかく飼っていたモルモットを何とか自分たちの記念に残したいと言い出しました。そこで、このグループは、モルモットの模型を作ろうということで、発泡スチロールを台にしなが、その上に桐の粉（ひな人形の原料）を取り寄せて、それを用いて、実物大のモルモットの模型を、今作っているところです。これは、カチンカチンになりまして、ひな人形が2、3百年もつように、これも、落としてもそんなに簡単に割れるものではありません。ただ、木の粉ですから、茶色っぽい色をしていますので、この上から白の絵の具（アクリル絵の具）で色を着けて、モルモットのようにして、自分がイメージしているモルモットを作品として仕上げていきました。10人に1匹ですから、これを誰か1人がもらえることになるわけです。残りの9人はもらえないんです。したがって、もらえないということを考えれば、自分でレプリカのような形で残しておきたいという気持ちになったようです。このグループは、模型づくりをやりました。ほかのグループは、このように、アルバムづくりをしたところもありました。デジカメで、モルモットを撮って、自分も撮って、そして、コメントをつけることをします。これを一人1ページで、10人だと10ページになるわけです。これを合わせてカラーコピーしてあげて、これを各自が持っていることとなります。このように子どもたちは思い出を冊子の中に共有して持つことになるわけです。という形で、卒業までモルモットとかかわりました。

この作業をしているときに、1匹のモルモットが死にました。突然死んでしまったわけです。このことについても、獣医師の中川先生にご足労いただいて、対処していただいたわけですが、死んだモルモットをみんな嫌がるかなと思ったら、2年間も飼っていると、この写真のようにさわりたいがります。冷たさを感じて、非常に神妙な顔をしていました。おなかも解剖していただきまして、何が原因か調べていただきました。特に病気ではなかったんですが、学校の隅の方に穴を掘って埋めました。ここにお墓をつくりました。このグループは、作品を作っている最中にモルモットが死んでしまったので、お墓を撮影したりしていました。これもアルバムとして残していくことにしました。

これで映像は終わりです。資料の方を見てください。私が、モルモットを教室で飼うということになったのは、今の保護者が、都会のせいなのかもしれませんが、簡単な労力で最大限の教育的な効果を得ようとする傾向が非常に強いように思います。ですから、子どもたちも経験が少ない。当然保護者の中にも、まったくほ乳類を抱いたこともないという方もいます。しかし、こういう活動をやりませんかという、保護者の多くはやりたいと言います。つまりその意味は、教育的な価値は認める。しかし、それを行う際、自分にできるだけ負担のないようにしてほしいという考え方をするわけです。私はそれをなるほどと聞きながら、しめしめと思うわけです。つまり、飼育にかかわってみれば、そんなこと言っていられないんです。つまり、飼育というのは手間もかかるし、時間もかかります。その体験を子どもたちと一緒にやっというねらいが私の方にありますので、参加するということはいいいんですが、飼育のたいへんさを多くの保護者はわからないでいます。だから、そういう意味でも、このような体験を続けていきたいと考えるわけです。

実際体験してみると、困ることもたくさん出てきます。しかしそれは、1つ1つが教育的にはとても大事な要素であって、誰彼でも成功するような教育ではあまり価値がないんじゃないのかと思います。1つ1つのことにいろいろな問題点があって、その問題点を1つ1つクリアしていくことによって、彼らの中にいろいろな力が付いていくようになるであろうと思うわけです。つまり子どもたち1人1人の問題解決する力を、この飼育という場で彼らに体験させる。その体験させるエネルギーは、やはり、動物がもつ魅力なんです。これが、ザリガニだったら平気で見殺しにしちゃうんです。だって、抱っこしても冷たいんですから。やはり、ほ乳類の良さというのは抱っこして温かい。可愛らしさがある。自分の思うことが、言葉は通じなくても何か通じたような気がする。こういうことは、子どもたちの日記を見ればすぐにわかります。たとえば、これで土日各家庭にホームステイに行く。そこで、家族の誰かが、冷蔵庫を開けたとするとその音で必ず鳴きます。つまり冷蔵庫を開ける音で、自分はエサをもらえると思うわけです。そういうことに保護者や子どもたちはビックリするわけです。ザリガニじゃ鳴きませんから、このようなことから、ほ乳類の魅力というのはたくさんあるわけです。

それからもう一つ、みんなで飼っているという責任感があるんです。多くのお母さんは必ず言います。「私のところで死んだらどうしよう」。でも、私が仮に、各家庭にいるときに死なしてしまったらたいへんなこととなりますよ。といったら、誰も飼育には参加しません。ですから、いずれ生き物は死

ぬんですから、死んで当たり前なんですから、別に死ぬことを怖がる必要はない。しかし、死ぬところまで、死ぬ間際まで、最大限の飼育をしていましたか？ということは問われるよ、と言います。つまり、飼えばなしで、何も世話しないで、水もあげないで死んだらこれは寿命でしたなんて言えないでしょう？と言います。だから、途中病気で死ぬかもしれない。だけど、子どもも、保護者も、担任も、一生懸命育てていて、それで死んだらしかたがないでしょう？そこまで頑張りましょう。という話をするわけです。そうすると、保護者の方々も少し、肩の荷が下りるわけです。だからといって、手抜きをするわけではなく、一生懸命飼育してくれます。現実には、私は1年生の担任をして、4月からモルモットを飼いましたけれども、2か月で1匹死んでしまったんです。たまたま家に持ってかえているときに死ぬんです。今まで、モルモットを死なせたのは、学校ではなく、すべて家に持って帰ったときなんです。みんなそうですから、わたしとしては気が楽なんです。保護者としては非常に怖いんじゃないでしょうか？でも、逆な言い方をすれば、あなたのところで、このモルモットは死にたかったんじゃないの？という言い方をするんです。なぜかは知りませんが、モルモットが死んでしまった体験をした家庭の子どもたちは熱心なんです。もしかしたら、抱っこしすぎてストレスを与えてしまったのかもしれませんが。それは、法則とは言えないですが、なんとなくそういう因果というか、そういうものが感じられるわけです。

1年生などは、結構冷酷で、「おまえが殺したんだろう？」などと陰で言うわけです。でもそうじゃないんだよ。と慰めてあげるわけですが、しかし、このことによってできた心の傷は、結構深いものがあります。だから、中川先生にお願いして、またすぐに新しいモルモットを、ただすぐに渡すとまだ恐怖感がありますので、一人介して、すぐにその次の週に、死なせてしまった子どもの家庭に持って行かせて、4日間うまく過ごさせたところ、その子の傷はずいぶん癒えたようです。そういうところをフォローしながら、いかに継続させるかということが、飼育の難しさかなと思います。生き物を扱っているわけですから、いつまでも生きていくわけではありません。そういうところも、**教師側で考えなければいけない配慮**なんではないかと思います。

### (子どもの行動が発展する)

このように動物を飼育すると、子どもたちの行動が周りに発展していきます。ひとつは、捨てネコを子どもたちはよく拾ってくるんですが、動物を大切にと思えば、公園で捨てられているネコを拾ってきたりするわけです。あるとき、そのネコの周りに野次馬も含めて10人くらいいたんです。それは学校の帰りだったので、近所の獣医師さんにそのネコを看てもらったんです。学校は文京区というところにあるんですが、その獣医師さんたちは、学校の動物に関しては、無料で診察してくださることになっているんです。そのことを彼らは知っていましたから、無料で看てもらうことができたんです。目が開いていない子ネコで、かなり衰弱していたそうです。そういうことで、子どもたちはある程度のアドバイスを受けながら看てもらって、安心して持って帰ってきたわけです。そこで、学校の帰りですから、どうするかという話になって、ある1人の子が自分の家に持って帰ったんです。持って帰ったのはいいんですけど、治療も継続しなければいけないので、親と相談して近所の獣医師さんのところに連れて行ったんです。子ネコは衰弱していますから点滴も受けるし、点眼も受けたりして、1週間毎日通ったんだそうです。そうしたら、治療費が7万円もかかってしまったんです。その7万円をどうするかという話になって、学校でその10人がひそひそ話をしているんです。どうしたんだ？というと、先生は関係ないというんですね。でも、その話の内容は、治療費を払え、払わないということらしいんです。それはなぜかという、主に拾ってきたのは3人なんです。残りの7人は取り巻きだったんです。だから、主に拾った子が1万円で、取り巻子が千円なんていうようなことを話し合っていて、3人の子たちは1万円ずつ出そうね、なんてことを言っているんです。ほかの子たちは、払うという子もいれば、見ていただけだという子もいます。とうとう、その子たちの親にも伝わってしまって、保護者の中にもどうしたらいいのかと相談してきた方がいて、そこではじめて私は気がついたわけです。そして、7万円については、ある一人の保護者が払ってしまったわけです。その保護者の方は、「もういいです。私が全部払います」と言うんです。それは決してニコニコして言っているわけではありませんよ。ムツとした顔をしているんです。それじゃ私が...と言っても、私の給料では払えるものではありません。そこで、何かいい方法はないかと思ったときに、**学級で相談すること**にしました。私がクラスで提案したのは、**ネコ募金**です。そのころは12月だったので、そろそろお年玉の時期だねと言って、千円くらいいいのではないかと促したわけです。40人の子どもたちに、拾っても拾わなくてもみんな払おうよ、と言ったところ、口では言わないまでも、払いたくないという表情をする子どももいます。逆に、積極的に払うという子もいるんですね。そうしたら、12月のある日にある子どもが年賀

状配っているんです。よく聞いたら、切手を貼らなければいけない年賀状だったんです。その切手代をお母さんからもらって、自分は切手を使わずに配ったんです。それで4千円くらい募金した子もいたんです。それからある子どもは、モデルのようなアルバイトをしたらしく、**もらった図書券を全部つぎ込んだ**んです。そんなことで、合計4万5千円くらい集まったんです。それを、治療代を払った保護者に渡して、残り2万5千円くらいあるんですが、それは、その保護者がいいですよと言って、自腹を切ってくれました。私も少しだけ、1万円くらい出したわけです。

そういうことが起きて、一方では、ネコなんか拾ってくるなと思う気持ちもあるんですが、あの子どもたちの行為を考えると、私がモルモットを教室に導入して、それで**触発された子どもたちの気持ち**を、お金がかかるからと言ってむげにつぶしてしまうのもいけないことだと思いますし、そういういい行為がいい方向に向かっていってくれるといいなと思います。だから、今度拾ったときには、必ずお金がかかりますか？と聞けと言いました。子どもたちは学校のある文京区と自分が住んでいるところも同じだと思っているわけです。しかし、東京都には残念ながら文京区と同じように、治療費を持ってくれない区もあるんです。だから、学校で飼っている動物だということもちゃんとと言わないとだめだと、子どもたちには言いました。この辺、獣医師さんには是非ご理解いただきたいと思います。子どもたちはよかれと思ってやっていることなので、治療費が必要であれば、治療費かかるけどどうしますか？とっていただければいいんです。ところが、**保護者に聞いてみたら、ただネコを持っていった、獣医師も治療したというだけで、細かなコンセンサスがとれていなかった**ということです。そういうところも問題としてありました。

#### (クラス替え後の動物の行く末)

もう一つの問題点は、先ほども言ったように、**学級の解体によって動物をどうするか**ということなんです。私は、子どもたちに相談しました。たまたま1匹は死んでしまったので、のグループはそういうことを考える必要がなくなりました。でも3匹残っています。そうしたらあるグループは自分が引き取るといった子どもがいました。そのグループでは、その子に飼育のセットごとあげました。もう一つのグループは、2人引き取りたいという子どもが出てきました。最初交代でということだったんですが、1人の子が積極的だったので、その子が引き受けてくれました。ところが、あるグループは誰もいなかったんです。10人子どもがいて、引き取り手は0だったということです。最初はそのグループには引き取り手が5人くらいいたんです。なぜこのグループだけ5人もいるんだろうと不思議に思いました。そこで、もう一度家で相談するようにそのグループの子どもたちに言いました。具体的には、希望者が自分一人だったと言うように言ったわけです。そうしたら、「うそをつくの？」と言ってきたんです。そうか、嘘じゃまずいな、ということで、一人だったらどうする？と聞いてこいと言いました。5人もいるということは、親の心の中に、あんなにみんな真剣に飼っているんだから、ちょっとだけいいんじゃないかという甘えがあったのではないかと思うんです。私は、今みたいに「僕しかいませんでした」という情報を流して、それでも本気で引き取る気があるか？ともう一度保護者に聞きに行かせたんです。そうしたら、翌日0になりました。そうしたらある子が「これどうするの？学校で飼えば？」とその子どもは言うんです。「学校って誰？」「校長先生飼うの？」と聞くと、「そうだな...」と考え込んで、「先生が飼えば？」と言うので「いいの？」「いいよ」と言って、「それじゃ、君たちにはもう手を出させないよ。先生のところには新しい4年生が来るんだから、**君たちにはさわらせないよ**」と言ったんです。そして「考えてみて。君たちは2年間飼っていて、上手に抱っこできるけど、新しい4年生は、誰もさわったことがないんだよ。もしかしたらここから落とすかもしれないよ。それを黙ってみているんだね」と脅かしたわけです。そうしたら、「それは許さない」と言うんですね。でも、君たちにはさわらせないんだから、窓の外から自分たちがかわいがったモルモットが虐待される姿をじっと見ていなさいと揺さぶったんです。そうしたら、彼らはそこから本気になりました。**本気になって、それで彼らは何をしたか**というと、**親を説得した**んです。その結果3人出てきました。それでできたのが「**モルモットを育てる会**」なんです。つまり、3人ずつ順番に1か月ごとに家を回ることにしたんです。

#### (その後の保護者からの手紙)

ちょうどこのことが、NHKの総合的な学習の時間のテレビで放映されました。そして、その会のモルモットが4年間飼ったところで死にました。資料の25ページをご覧ください。こういうことがあって、育てる会のモルモットが死んで、育てる会のうちの1人に感想を書いてもらったんです。それが25ページに載っているものです。これを読んで終わりにしたいと思います。

「教室においてグループで飼っていた2年間、シーリンをめぐっては、いろいろなことがあり、よい意味でも悪い意味でもうちの娘は特別な存在になっていたように思います。『シーリンを育てる会』にしてもお世話したい気持ち3割、あとの残りはおそらく義務感と意地であったと思います。決して崇高な動物愛からお引き受けしたものではありません。

ただ4人で飼うということになった時、これで無責任な仲間に腹を立てる必要がなくなったという開放感もあって、シーリンへの愛情がそこで大きく増えたという気がしています。

2か月に1回、シーリンは我が家にやってきては得意のおねだり攻撃で野菜を食べては我が家にほほえみの種をまいていってくれました。そして、次の方にお回しするときには、親の私はまるで自分の子どもを移動教室にでも送り出すような気分になされたものです。

4月の下旬、無事に送り出したシーリンでしたが、Sさんが旅行に出かけるということで、急遽、シーリンが戻ってきました。『6月まで寂しいね』といていた矢先のこの偶然は、今にして思えば神様のお計らいだったのかもしれませんが。うちに戻ってシーリンはいつものように愛嬌をふりまき、しかし、その2日後、突然逝ってしまいました。我が家に戻ったのは、まるで『死ぬ』ためだったとしか思えないような急逝でした。

一時はダイエットをしなければならないほど立派な体格だったシーリンでしたが、徐々に体重はへっていき、2か月の移動教室から戻ってくるたびに一回りも二回りも小さくなっていくのは、見ていて痛々しいほどでした。

シーリンを育てる会が発足したとき、たぶん誰しも思ったことは、『我が家では死んでほしくない』ということだったろうと思います。ですが、体重の減りがプラトーンに達し、シーリンの死がそう遠い未来の話ではないと思いはじめたとき、私は自分の気持ちが変わってきていることに気づきました。『シーリンを看取りたい』『死ぬのなら我が家で』そんな思いが沸々とわき出してきました。そんな私の気持ちにこたえるように、シーリンは我が家で死を迎えました。

シーリンの死を他の3家庭に知らせ、電話口で親同士涙を流しました。そのとき、私は、ふと、娘の学校文集の分掌を思い出しました。娘は、『シーリンが結んでくれている仲間との絆』という言葉を使っていたのですが、この絆は、子ども同士のみならず、親の間にも存在していたことに驚きを隠せませんでした。シーリンは死んでなお、親の心の中にまで、温かいものを授けてくれたのでした。

シーリンの飼育を続けてきた中で、娘がどのように成長したか、どのような教育効果があったのか、そのようなことはわかりません。なぜなら、シーリンは子どもの教育玩具ではなく、4家庭に引き取られた時点でそのような見返りを求めない、ただの『愛おしく思う存在』だったからです。死を体験させた生命の尊さがどうのこうのという、そんな不遜な冷めた目でシーリンの死を見つめることは、私にはできません。

強いて言うならば、娘は、シーリンの死を痛ましく悲しく思うことで、『愛情』というものを推測し得たのではないかと、そんなふうに考えております。

娘が文集に書いていた『シーリンからもらった宝物』が、これからの娘の人生にどのような影響を及ぼすかはわかりませんが、『愛おしく思える気持ち』をもてる喜びを、シーリンからもらったのだということを、いつかそっと思い出してほしいと思っています。U子の母

(注：図表・映像は掲載してありません)